三国志（三）

吉川英治全集

第28巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

吉川英治全集・28　三国志(三)

著　者　吉川英治

装幀者　杉本健吉

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九
電話東京九四二局一一一一(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　大製株式会社
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉

第一刷　昭和四十一年十月二十日　第二刷　昭和四十一年十月二十五日

定価　六百八十円

© 一九六六年　吉川英治

目次

図南の巻　三
出師の巻　一五七
五丈原の巻　三三三

三国志

(三)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

図南の巻

日輪

一

呉侯の妹、玄徳の夫人は、やがて呉の都へ帰った。
孫権はすぐ妹に質した。
『周善はどうしたか』
『途中、江の上で、張飛や趙雲に阻められ、斬殺されました』
『なぜ、そなたは、阿斗を抱いて来なかったのだ』
『その阿斗も、奪り上げられてしまったのです……それよりは、母君の御病気はどうなんです。すぐ母君へ会わせて下さい』
『会うがよい、母公の後宮へ行って』
『ではまだ……御容体は』
『至極、お達者だ』
『えっ。お達者ですって』
『女は女同士で語れ』
いぶかる妹を、膠もなく後宮へ追い立て、孫権はすぐ政閣へ歩を移して、群臣に宣言した。
『予の妹は、玄徳の留守に、その家臣共から追われ、今日、呉へ立ち帰った。かくなる上は、呉と荊州とは、事実上、なんらの縁故もないことになった。即時、大軍を起して、荊州を収め、多年の懸案を一挙に解決してしまおうと思う。それに就て、策あらば申し立てよ』
すると、議事の半ばに、江北の諜報がとどいて、
『曹操四十万の大軍を催し、赤壁の仇を報ぜんと、刻々、南下して参る由』と、あった。
俄然、軍議は緊張を呈した。
ところへ又、内務吏から、
『重臣の張紘、先頃から病中にありましたが、今朝、息をひきとるにあたり、遺言の一書を、わが君へと、認め終って果てました』
『なに、張紘が死んだ』
折も折である。呉の建業以来の功臣。孫権は涙しながらその遺書を見た。
張紘の遺書には縷々として、生涯の君恩の大を謝してあった。そして、自分は日頃から、呉の都府は、もっと中央に地の利を占めなければならぬと考え、諸州に亙って地理を按じていたが、秣陵（南京付近）の山川こそ実にそれに適している。万世の業礎を固められようとするなら、ぜひ遷都を実現されるように。これこそいま終りに臨んでなす最後の御恩報じの一言であると結んであった。
『忠義なものである。この忠良な臣の遺言をなんで反古にしてよいものではない』
孫権は、一方には、刻々迫る戦機を見ながら、一面直ちに、その居府を、建業（江蘇省・南京）へ遷した。

かくてその地には、白頭城が築かれ、旧府の市民もみな移って来た。

また、呂蒙の意見を容れて、濡須（安徽省・巣湖と長江の中間）の水流の口から一帯にかけて、堤を築いた。これに使役される人夫は日々数万人、呉の国力の旺なることは、こうした土木建築にも遺憾なくあらわれた。

もちろんこれは、やがて来るべきものに対する国防の一端である。来るべきもの、それは曹操の南下だ。

曹操はそれよりもずっと早くから宿望の南征と呉への報復に専ら軍備の拡充を計っていた。

すでに四十万の大編成は、

『いつでも』と、いう態勢を整えたので、いよいよ許都を発しようとすると、長史董昭が諂って彼にこうすすめた。

『およそ古来から、臣として、丞相のような大功をあげられた御方は、是を歴史に見ても、求めることはできません。周公も呂望も、比較にはならないでしょう。乱世に立って、群盗乱臣を平らげ、風に櫛けずり雨に浴みし給うなど、三十余年、万民のために、また漢朝のために、身をくだかれて来たことは、ひとしく天人倶に知るところです。今はよろしく、魏公の位に登って、九錫を加え、その威容功徳を、天下に見せ示すべきでありましょう』

二

どんな英傑でも、年齢と境遇の推移と共に、人間のもつ平凡な弱点へひとしく落ちてしまうのは是非ないものとみえる。

むかし青年時代、まだ宮門の一警手にすぎなかった頃の曹操は、胸いっぱいの志は燃えていても、地位は低く、身は貧しく、稀く、同輩の者が、上官に媚びたり甘言につとめて、立身を計るのを見ると、（何たるさもしい男だろう）と、その心事を憐み、また部下の甘言をうけて、人の媚びを喜ぶ上官には猶更、侮蔑を感じ、その愚をわらい、その弊に唾棄したものであった。

実に、曾つての曹操は、そういう颯爽たる気概をもった青年だった。

ところが、近来の彼はどうだろう。赤壁の役の前、観月の船上でも、うたた自己の老齢をかぞえていたが、老来まったく青春時代の逆境に嘯いた姿はなく、ともすれば、耳に甘い近側のことばにうごく傾向がある。

彼もいつか、むかしは侮蔑し、唾棄し、またその愚を笑った上官の地位になっていた。しかも今の彼たるや人臣の栄爵を極め、その最高にある身だけに、その巧言令色にたいする歓びも受け容れかたも、到底、宮門警手の一上官などの比ではない。

いま重臣董昭から、

（この際、魏公の位に登って九錫を加えられては如何ですか）

と、すすめられると、曹操はなにを憚かる考えもなくすぐに、

（そうだ、なぜ自分は、今まで九錫を持たなかったろう）

と、すぐその気になって、朝廷にそのゆるしを求めた。もちろんその意の儘になる。彼は以後、魏公と称し、出るも入るも、九錫の儀仗に護られる身となった。

九錫の礼というのは、

一　車馬　大輅、戎輅。大輅ハ金車、戎輅ハ兵車ノ事。黄馬八匹。

二　衣服　王者ノ服。袞冕赤舄。朱ノ履タル事。

三　楽県　軒県ノ楽、堂下ノ楽。昇降必ズ楽ヲ奏ス。

四　朱戸　門戸ハ紅門ヲ以テ彩ル。
五　納陸　朝陸ヲ登ル自由。
六　虎賁　常時門ヲ衛ル軍三百人、虎賁軍トイウ。
七　鉄鉞　鉞各〻一、鉄ハスナワチ金斧、銀斧ナリ。
八　弓矢　彤弓一、彤矢百、玈弓十、玈矢一千、朱弓、黒弓ナリ。
九　秬鬯　祭祀ヲ行ウタメノ酒

これをみた荀彧はかなしんだ。以前の曹操とは次第に変って来るのを冷静に彼のそばで眺めていたのは、彼よりは年下のこの荀彧という忠良な一忠臣だった。

『丞相。すこしあなたも、お年をお召しになり過ぎはしませんか』

『なぜだ』

『愚に返ったところがお見うけされます』

『予が九錫の礼を持ったことを云うのか』

勃然と、曹操は、色をうごかした。荀彧は、静かに、

『そうです。功いよいよ高きほど、御自身は、退謙をお示しあるべきです。然らずんば、折角、三十余年、旗に漢室への忠誠をかざし、口に万民のためと称しながら、結局、あなた御自身の慾望に過ぎなかったということになりましょう。弱冠、生死の迷妄を捨て、百戦苦闘、今日を築いて来ながら、その精神と節操を、門の飾りや往来の見得などと取替えるなどは、実につまらぬ人生の落ちではありませんか』

涙をふくんで諫めると、曹操はぷいと席を去って、

『おいおい、董昭をよべ』と、近侍へいいつけながら、大歩して去ってしまった。

以来、荀彧は、病と称して、自邸にひき籠ってしまった。建安十七年冬十月、いよいよ南下の大軍は都を出ることになったが、彼はなお、曹操から呼びに来ても、

『このたびは御供できません』

と、参加を辞した。

ついに、使者が來た。

『魏公からのお見舞いである』

と、使者は、食物の入っている一器を彼の前に贈った。

見ると、器の上には「曹操親ラ之ヲ封ス」という紙が懸けてある。あとで開いてみると、器の中には何も入っていなかった。

『お気持は分った。……噫』

荀彧は、その夜、自ら毒を服んで死んだ。

三

すでに南征の大軍は、水陸から続々と呉へ下っていた。

途中、曹操へ、都から知らせがあった。

『荀彧が毒を服みました』

『……自害したか』

曹操は瞼をとじた。ほろ苦い眉をひそめて。

暫く黙っていたが、やがて、

『荀彧は、ちょうど五十歳だったな。不愍なことをした。敬侯と諡してやれ』

それきり何も云わなかった。多少、悔ゆる色が無いでもない。

日をかさねて、行軍は安徽省に入り、濡須の堤を前にして、二百余里に亙る陣を布いた。

『まず、敵の大勢を見よう』

曹操は、山へ登った。そして遙かに、呉の陣を見わたすと、長江の支流は百腸のように曠野を縦横にうねり、その一つの大

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

きな江には数百艘の兵船が望まれる。
敵はその辺りを中枢として水陸に充満していた。船櫓の鳴るところ旗ひらめき、剣槍の耀くところ士馬の声震い、草木も挙って、国を防ぐために戦いているかと思われた。
『ああさすがに呉は南方の強国だ。この士気では油断はできぬ。汝等も努めてふたたび赤壁の不覚をくりかえすなよ』
左右の大将を戒めながら彼が山を降りかけた時である。轟然、どこかで一発の石砲がとどろいた。その砲声からしてすでに北国にはない強力な硝薬の威力を示している。
『すわ』
と、噪ぎたつ間もない。山の麓近くの江から忽然と喊声が起った。いつのまにか附近の蘆荻の蔭から無数の小艇があらわれ、呉の精猛が煙のように堤をこえて突貫して来る。正に、魏の中軍へいきなり楔を打ちこんで来たかたちだ。
『退くな。奇襲の敵は少数ときまっている』
曹操は、山を降りると、敢然、陣頭に出て乱れ立つ味方をとどのえた。
すると彼方の堤の上に、青羅の傘蓋を翳し、星の如き群将に守られていた呉侯孫権が曹操を認めると、馬をとばして馳けて来た。
『赤壁の亡将、まだ生命をぬすんでいたか』
その声に、曹操は振り向いた。
碧眼、紫髯、胴長く、脚短く、しかも南人特有な精悍の気満満たる孫権。槍をふるって、石弾の如く突いて来た。
『何者だっ』
わざと曹操は大喝した。自分よりはるかに若い孫権と、剣槍を以て闘う気はない。威だけを示して逃げようとした。
『逃ぐる勿れ。魏賊』
と、その気を察して、孫権の左右から、韓当、周泰のふたりが分れて、曹操のうしろへ迫った。
危地に陥いったかと曹操の身が困難に見えたとき、彼の味方も亦、鼓を鳴らして、孫権のうしろを突き崩し、乱軍の相を呈しかけた機に、魏の許褚は、刀を舞わして周泰、韓当を退け、辛くも曹操を救い出して、中軍へ帰った。
この晩、いちど退いたかとみえた呉軍が夜半に又、四面の野や小屋に火をはなって、夜襲して来た。
遠征の疲労にあった魏の兵は、不覚にも不意をくって、呉の勢に馳け破られ、夥しい死者をすてて総軍五十里ほど陣を退くのやむなきに立ち至った。
『われながら、まずい戦』
曹操は悶々、自己を責めた。幾日かを空しく守りながら陣小屋の内にかくれて、凝と軍書にばかり眼を曝していた。
なにか、天来の妙計を、それから求めようとしている悶えがわかる。跫音をしのばせて、そっと入って来た程昱が、
『丞相。おつかれではありませぬか』と、声ひくく慰めた。
『……おお、程昱か。呉の堅陣に対して打つ手がない。初手の戦も、彼の攻勢に、味方は漸く防いだのみだ』
『抑〻。このたびの御出陣は遷延また遷延をかさね、ちと遅すぎました。故に呉は国防に全力を賭し、その期間に濡須の堤まで築いてしまった程です。如かず、一応引揚げて、ふたたび御出征を図られてはどうですか』
その晩、曹操は、ふしぎな夢を見た。焔々たる日輪が雲を捲いて、空中から大江の波間に落ちたとみて眼がさめたのである。

四

あくる日。

五、六十騎をつれて、彼は陣中を見まわり、何気なく江の畔を歩いて来た。

ちょうど真っ赤な夕陽が、江の上流の山に沈みかけていたので、曹操はゆうべの夢を憶い出して、

『昨夜ふしぎな夢を見たが、吉夢だろうか、凶夢だろうか』

と、左右の将に語っていた。

すると、夕陽の光線と、江の波光とが相映じて、眩ゆいばかりぎらぎら燃えている彼方の赤い靄の中から、一旗、二旗、三旗、無数の旗が見え初めた。

『や。敵？』

いうまもない。

黄金の盔に、紅の戦袍を着、真っ先に進んで来た大将が、鞭をあげて、曹操をさしまねきながら揶揄して云う。

『国を侵す賊は何者だ』

『孫権か。予は、曹操である。王室の順に従わぬ者は討てとの、勅を奉じて下った天子の軍である』

『あら、笑止』

孫権は、哄笑した。

『天子の尊きは、誰も知る。故に、天子の御名を詐るものは、人ゆるさず、地ゆるさず、天ゆるさず。孫権もまたゆるさぬ。人中第一の悪人曹操、首をさしのべよ』

これを聞くと曹操の気は怒るまいとしても怒らざるを得なかった。彼は又も、敵の仕掛けた戦に誘われて戦った。この日の戦闘も、惨烈をきわめたが、結果は、魏の大敗に帰してしまった。

『どうも、こんどの遠征は、いつもの丞相らしい冴えがない』

諸将はいぶかった。

許都を発するとき荀彧が毒を服んで死んだことなどが、なにか、丞相の心理に影響しているのではあるまいか、などと囁く者もいた。

いずれにせよ、連戦連敗をかさねて、その年の暮れてしまったことは現実だった。

翌建安十八年、正月となっても、捗々しい戦況の展開はなく、二月に入ると、毎日、ひどい大雨がつづいて、戦争どころでなくなってしまった。

人類がこの地上で遭遇した大雨の記録を破ったろうと思われるほどな雨量だった。日夜大雨はやまず、陣小屋も馬つなぎも、悉く流され、曹操の中軍すら、筏を組んで、遙な北方の山上へ移って行ったような有様だった。

次には当然、食糧難が起って来た。兵はうらみを含み郷愁を思う。

諸将の意見も区々だった。硬論を主張するものは、陽春の候もやがて近し、死馬を喰って頑張っても、その時を待って一戦を決せずんば、遙に南下した効もないと云う。

こういう状態の中へ、呉侯孫権から一書が来た。文に曰く。

予モ君モ共ニ漢朝ノ臣タリ、マタ民ヲ泰ンズルヲ以テ徳トシ任トスル武門ノ棟梁デハナイカ。仁者相争ウヲ嘲ッテカ天ハ洪々ノ春水ヲ漲ラシ、君ノ帰洛ヲ促シテ居ル。賢慮セヨ君、再ビ赤壁ノ愚ヲ繰返スコトナキヲ。

建安十八年春二月呉侯孫権書。

ふと、書簡の裏を見ると、又、

足下不死
孤不得安

と、書いてある。

曹操は苦笑して、次の日、

『帰ろう』

あっさりと、引揚げを命令した。

呉軍も、それを見て、みな秣陵の建業（南京）へ帰った。

孫権はすっかり自信を得て、

『曹操すら恐れて帰った。いま玄徳は蜀境に動いている。この時を措かず荊州へ進もうではないか』と、群臣に諮った。

宿老の張昭は、いつも若い孫権に歯止めの役割をしていたが、このときも次のように云った。

『蜀の劉璋へ、一書をおつかわしあって、玄徳は呉へ後詰を頼んで来ている。必ずや蜀を横奪する考えにちがいない、とまず劉璋を疑わせ、また漢中の張魯へも、物資軍需の援助を云い遣り、しばらく玄徳を苦しませて、後おもむろに荊州を取るのが一番の良策でしょう』

上・中・下

一

葭萌関は四川と陝西の境にあって、ここは今、漢中の張魯軍と、蜀に代って蜀を守る玄徳の軍とが、対峙していた。

攻めるも難、防ぐも難。

両軍は悪戦苦闘のままたがいに譲らず、はや幾月かを過していた。

『曹操が呉へ攻下ったという報らせが来た。濡須の堤をはさんで、魏呉、死闘の大戦を展開中であるという。……龐統、いかがしたらよいか』

玄徳がたずねた。答える者は、龐統。孔明に代って従って来た唯一の軍師である。

『遠い遠い江南の大戦。ここの戦局には、何も関わりはないでしょう』

『いや、大いにある』

『なぜです？』

『もし曹操が勝てば、翻って、荊州も併せ呑んでしまうであろうし、また呉の孫権が勝利を得れば、その勢にのって、進んで荊州をも占領するであろうことは、火をみるよりも明かである。いずれにせよ、わが本国の荊州にとっては、滅亡もまぬかれぬ危機ではないか』

『孔明がおります。荊州の留守について、そんな御心配を征地で抱かれるなどと聞いたら、孔明は嘆きましょうよ。——自分はまだそんなにも君の御力と成るに足らない者かと』

『そうかな……』

『むしろこの際、その聞えを利用して、蜀の劉璋へ一書をお送り下さい。いま曹軍が南下したので、呉の孫権から、荊州へ救いを求めに来ている。呉と荊州とは、唇歯の関係にあるし、姻戚の義理もある。——依って駈けつけねばならないが、魏の曹軍に対しては、いかんせん兵力も兵粮も足らない。精兵三、四万に兵粮十万石を合力されたい。……こう云い遣ってごらんなさい』

『ちと、求めるのが、莫大すぎはしないか』

『同宗のよしみと、こんどの事を恩にきせて、ともあれそれ位

な要求をしてみると、劉璋の心底も見当がつきましょうし、巧く望みどおりの力を貸してくれれば、そのあとで龐統にもいささか策がありますから』

『それもよかろう』

使者は、成都へ向って行った。

途中、涪水関（重慶の東方）にかかると、その日も、山上の関門から手をかざして、麓の道を監視していた番兵が、

『玄徳の部下らしく、小旗を持った荊州の使者が、今これへかかって来ます。通しますか、拒みますか』と、蜀の二将、楊懐と高沛の前に告げた。

山中の退屈まぎれに、二人は碁を囲んでいたが、玄徳と聞くと、すぐ眼角をたてて、

『待て待て。滅多に通すな』と、番兵を戒め、何か、首をよせて、相談していた。

成都に赴く使者は、玄徳の書簡を、関門役人に内示した。見せなければ通さん、というのでぜひなく証拠として示したのである。高沛と楊懐は蔭で読んでしまった。

『お通りなさい』

ゆるされて、書簡も返されたが、大将楊懐が兵をつれて、

『成都まで御案内申す』と、従いて来た。

いまや蜀の内部には、反玄徳気勢が昂まっていた。楊懐もそのひとりで、早速、劉璋の前へ出て、こう進言した。

『玄徳から莫大な兵と粮食を借り求めて来たようですが、決してお貸しになってはいけません。彼の野望の火へ、わざわざ乾いた柴を積んでやるようなものでしょう』

劉璋は相かわらず煮えきらない顔いろである。恩義もあるし、同宗の誼みもあるし、などと口のなかで繰り返している。それを見て、侍将のひとり劉巴、字は子初というものが、

『わが君。私情にとらわれて国を亡し給うな。彼に粮を与え、兵をかすは、虎に翼を添えて、わざとこの国を蹂躙せよというようなものです』

居合せた黄権もまた進み出て、

『楊懐、劉巴のことばこそ、真に国を憂うる忠誠の声とそんずる。何とぞ、御賢慮をたれ給え』

と、口を酸くして諫めた。

こう重臣のすべてが反対では劉璋もそれに従わざるを得ない。

しかしただ断るのもわるいというので、戦線には用いられないような老朽の兵ばかり四千人と穀物一万石、それと廃物にひとしい武具馬具などを車輛に積んで、使者と共に、玄徳へ送りとどけた。

玄徳はその冷淡に怒った。

二

彼が怒ったのはめずらしい。

劉璋の返簡を、使の前で裂き捨てて見せた。

『わが荊州の軍は、はるばるこの蜀境に来て、蜀のために戦い、多くの人命と資材を費やしているのに、わずかな要求を惜んで、粮も兵も、こんな申し訳ばかりのものを送って来るとは何事か、これを眼に見た士卒に対し、どういう辞を以て、よく戦えと励ますことが出来るかっ。——立ち帰ってよく劉璋に告げるがいい』

輸送に当って来た奉行はほうほうの態で成都へ帰った。

そのあとで、龐統が、

『由来、皇叔というお方は仁愛に富まれ、怒ることを知らない人といわれていましたのに、今日の御立腹は近ごろの椿事でし

た。あと味はどうですか』
『稀にはよいものと思った。――が先生、このあとの策は予にないのだ。何ぞ賢慮はないかな』
『策は三つあります。どれでもわが君の意に召した計をお採りになるがよいでしょう。一策は、今からすぐ昼夜兼行で道をいそぎ、有無なく成都を急襲する。このこと必ず成就します。故にこれを上策とします』
『む、む』
『第二は、いま詐って、荊州へ還ると触れ、陣地の兵をまとめにかかる。すると楊懐、高沛などは、かねてより希望していることですから、かならず面に歓びをかくし口に惜別を述べて送りに来ましょう。そのときこの蜀の名将二人を一席に殺して、忽ち兵馬を蜀中へ向け、一挙、涪水関を占領してしまう。これは中策と考えられます』
『む、む。もう一計は』
『ひとまず、兵を退いて、白帝城にいたり、荊州の守備を強固となし、心しずかに、次の段階を慮ること是れです。……が、これは下策に過ぎません』
『……下策はとりたくない。また第一の案も急に過ぎて、一つ躓けば、一敗地に塗れよう』
『では、中計を』
『中庸。それは予の生活の信条でもある』
日を経て、成都の劉璋の手許へ、玄徳の一書がとどいた。それには、呉境の戦乱がいよいよ拡大して来たことを告げ、荊州の危急はいま援けにゆかなければ絶望になる。まこと本意ないが、葭萌関には誰か良い蜀の名将をさし向けられたい。自分は急遽、荊州へ回ると――認めてあった。
『それみい、玄徳は回るというて来たではないか』
劉璋はかなしんだ。
然し、反玄徳勢力は、ひそかに胸で凱歌を奏している。
ひとり悶えたのは、大勢をここまで引張って来た張松である。彼の立場は当然苦境に落ちる。
『そうだ』
邸に帰ると、張松は、筆を把って、玄徳へ激励の文を書いた。折角、ここまで大事をすすめながらいま荊州へ引揚げては、百事水泡に帰すではないか。何ぞ一鞭して、あなたはこの成都へやって来ないか。実に遺憾だ。成都の同志は首を長くしてあなたの兵馬を待っているものを。
そう書いているところへ『お客さまです』と、家人が告げに来た。
張松はあわてて手紙を袂へかくして、客間へ出てみた。見ると酒好きな兄の張粛が、もう酒の瓶をあけて飲んでいた。
『なんだ。あなただったのか』
『顔いろが悪いじゃないか』
『つかれですよ、公務が忙しいので』
『つかれなら薬を飲め。さあ、酌いでやろう』
張松も思わず酒をすごした。兄はなかなか帰らない。長尻につられて彼も酔った。そのうちに二度厠へ立ったが、急に、兄の張粛は帰るといって出て行った。間もなく、入れ代りに、成都の兵がどやどやと入って来た。有無をいわせず張松を搦め捕り、家人召使、一人のこらず拉致して行った。
翌る日、市街の辻に、首斬が行われた。みな張松の一家であった。罪状書の高札には、売国奴たる大罪が箇条書してある。直訴人はその兄だったと街のうわさは喧しい。その兄と飲んでいるうち張松が酔中に袂から落した自筆の手紙が証拠になったものだという。

酒中別人

一

葭萌関を退いた玄徳は、ひとまず涪城の城下に総軍をまとめ、涪水関を固めている高沛、楊懐の二将へ、

『お聞き及びのとおり、遽に荊州へ立ち帰ることとなった。明日、関門をまかり通る』

と、使をやって開門を促しておいた。

高沛は手を打って、

『楊懐、絶好な時が来たぞ。明日、玄徳がここを通過したら、軍旅の労をねぎらわんと、酒宴を設けてその場で刺し殺してしまおう。――蜀の憂患を除くためだ。抜かり給うな』

と、ここでは二人が手に唾して夜の明けるのを待っていた。

翌る日、玄徳は大行軍の中にあって、龐統と駒をならべ、何か語りながら涪水関へ向って来た。

すると、一陣の山風に、旗竿の竿が折れた。玄徳は、眉を曇らせて、

『や、や。これは何の凶兆か』

と、駒を止めた。

龐統は、一笑して、

『これは天が前もって凶事を告知してくれたものです。故に、凶ではありません。むしろ吉兆というべきでしょう。――思うに楊懐、高沛がきょうこそ君を刺殺せんと待ちうけているものと考えられる。わが君、御油断あそばすな』

『その事ならば』

と、玄徳は、身に鎧を重ね、宝剣を佩き、悪鬼羅刹も来れと、心をすえて更に駒をすすめた。

龐統は、幕将の魏延、黄忠などに、何事かささやいて、一歩一歩のあいだにも、戦態を作りながら前進していた。

すでに、関門の大虞が、近々と彼方の山峡に見えた頃である。

楽を奏しながら、錦繡の美旗をかかげて、彼方から来る一群の軍隊がある。

真先に来た大将が云った。

『今日、荊州へ御帰還あるという劉皇叔におわさずや。遠路の途中をおなぐさめ申さんが為、いささか粗肴と粗酒を献じたく、これまでお迎えに出たものです。何とぞお納めをねがいたい』

龐統が出て挨拶した。

『これはこれは過分な礼物。皇叔にもいかばかりお歓びあるやしれません。高沛、楊懐の二兄にもよしなにお伝えおき下さい』

『いずれ後刻、陣中御見舞に伺う由ですが、取敢えず、酒肴をお目にかけよとのことに、あれへ品々を担わせて来ました』

と、夥しい酒の瓶、小羊、鶏の丸焼などを、それへ並べて帰った。

一行はそこに幕舎を張って、酒の瓶を開き、山野の風物に一息入れながら、杯を傾けて休息していた。そこへ高沛と楊懐が、兵三百を供につれて、

『お名残り惜しいことです。せめて今日は、親しくお杯を賜わ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com